

剣術家は伝書をいかに読むのか： 伝書の他者性に着目して

中嶋哲也（茨城大学）

要旨

本研究は、武道の伝書の他者性に注目し、他者としての伝書と実際の剣術家はいかに向き合ってきたのかを問題とするものである。具体的な本研究の課題として、まず、研究者のこれまでの伝書の読み方を検討し、その特徴を明らかにする。次に、古流剣術の道場において、剣術家の伝書の読み方と組太刀の実践が“相互変容”する在り様をフィールドワークにより明らかにする。そして、剣術家の伝書の読み方が研究者のそれとどのように異なるのか、伝書の他者性に注目しながら比較検討する。

伝書の他者性について考えていくときに近年台頭してきた人類学の存在論的転回は、大きなてがかりとなる。それは存在論的転回が 1980 年代以降の人類学における他者表象のアポリアを批判的かつ建設的に克服する試みになっていると考えられるためである。本研究では存在論的転回の動向を参照しつつ、剣術家の視点は研究者の視点にどのように再考を促すのか、について考えたい。